

3 主な病害虫と防除対策

(1) 病害

① うどんこ病

胞子の発芽適温は 20～25℃である。予防散布あるいは発病初期までに薬剤散布を行う。また、被害残渣をほ場に残さないようにする。

② 灰色かび病

20℃前後で多湿の時に発生しやすい。耐性菌の発生を回避するため、防除には同一系統剤の連用をさける。

③ 葉かび病

20～25℃で多湿条件を好む。収穫期に入り、肥料切れしたときに発生が多い。

④ かいよう病

25～28℃で多湿条件を好む。腋芽(わき芽)かきなどの傷口から感染するので、晴天時の作業とその後の殺菌剤散布を励行する。

⑤ 疫病

梅雨時の発生が多い。発病の適温は 20℃前後である。窒素肥料の過用、通風不良、灌水過多により発生しやすくなる。発病前から予防的に薬剤を散布する。

⑥ 土壌病害

青枯病、萎凋病、半身萎凋病、褐色根腐病、根腐萎凋病などがある。対策として、土壌消毒や輪作、接ぎ木栽培を行う。

(2) 虫害

① コナジラミ類

オンシツコナジラミとタバココナジラミが対象となる。雨よけ栽培では 5 月以降、気候が温暖になるにつれ密度が上昇する。特に、タバココナジラミはトマト黄化葉巻病(TYLCV)を媒介するので注意する。多くの農薬に対して耐性(抵抗性)を持つので、農薬の選択が大切になる。また、防虫ネット(0.4mm 以下目合い、あるいはサンサンネットクロスレッド 0.8mm 目合い)が必須であり、黄色粘着板による捕殺も有効である。

② アザミウマ類

ミカンキイロアザミウマとヒラズハナアザミウマが花に集まり、両種とも果実に白ぶくれ症をひきおこす。特にミカンキイロアザミウマは葉を食べる個体群も出てきており、トマト黄化えそ病(TSWV)やトマト茎えそ病(CSNV)を媒介するとともに 3 月末には野外でも十分活動できるので、注意が必要である。多くの農薬に対して耐性(抵抗性)を持つので、農薬の選択が大切になる。また、通常の白色防虫ネットでは防除できないのでサンサンネットクロスレッド(0.8mm 目合い)が必須となる。

③ オオタバコガ

大型のチョウ目害虫で、未熟な果実に食入し、被害を与える。多くの農薬に対して耐性(抵抗性)を持つので、農薬の選択が大切になる。防虫ネットの設置が必須である。

④ ハモグリバエ類

トマトハモグリバエが対象となる。近年、トマトでの被害は小さいが、多くの農薬に対して耐性（抵抗性）を持つので、農薬の選択が大切になる。

⑤ アブラムシ類

有翅アブラムシの飛来によるウイルス病の被害が時に多く発生するので、天窓など上方からの侵入を防ぐため、防虫ネットを開口部に展張する。ワタアブラムシなどは多くの農薬に対して耐性（抵抗性）を持つので、農薬の選択が大切になる。

⑥ ハダニ類

ナミハダニ、カンザワハダニが防除対象であるが、近年、ナス科寄生に特化したミツユビナミハダニの分布が全国的に拡大しており、トマトでの被害拡大が懸念されている。コナジラミ類やミカンキロアザミウマのように飛翔することはないが、圃場周辺の雑草からの移動や風に乗って移動し、ハウス開口部から侵入する。また、苗や人に付着してハウス内に侵入することもある。増殖率が高く、寄生が急拡大するので注意が必要である。吸汁害により葉色が悪くなり、生育に影響を及ぼす。多くの農薬に対して耐性（抵抗性）を持つので、有効な農薬に限られる。

⑦ トマトサビダニ

体長が約 0.2mm と非常に微小で、肉眼で見つけるのは難しい。トマトに寄生すると短期間で高密度になり、増加するにつれて、葉、茎、果実へと被害が顕在化してくる。葉では裏側が褐変して光沢を帯び、その後、変形して巻き込み、ひどくなると葉全体が褐変、枯死する。茎も被害部が褐変する。被害は下部から徐々に上部へと広がり、株が枯死することもある。密度が高くなると果実にも寄生し、被害果の表面は灰褐色になり、細かい亀裂が生じる。ハダニ類と同様、飛翔はできないが、風によって温室開口部から侵入したり、苗や管理作業によるハウス内への持ち込みが原因となる。初期発生は局所的であるが、管理作業等で周囲の株に広がっていく。